2017.9.30
No.203

編集・発行人　樋口みな子

E-mail
minginga@agate.plala.or.jp
URL http://www13.plala.or.jp/minginga/
郵便振替「銀河通信」
02740－7－56535
（郵送年間1,000円）

世界遺産のカナディアン・ロッキーを歩く

写真：9月9日バンフ国立公園のレイクルイーズで

すっかり秋が深まり、北海道ではストーブが恋しい季節になりました。大雪山系も初冠雪を記録しました。みなさまはお元気でしたか？

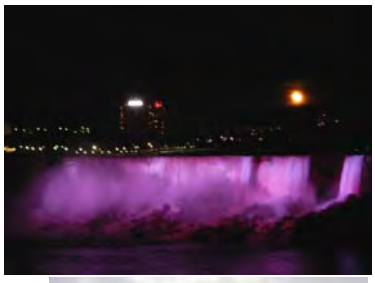
９月２８日、安倍首相が臨時国会の冒頭、衆院を解散しました。安保法や共謀罪を強行した日も忘れられませんが、森友、加計学園問題を国会の場で議論を尽くさないままでの解散は憲法と立憲主義を踏みにじるものです。歴代の首相でここまで民意を無視した政権があったでしょうか？権力に驕っている姿は醜いです。

なんとしても、民主主義と立憲主義を私たちの手で取り戻したいです。原発のない、戦争のない安心して暮らせる平和な社会を望みます。

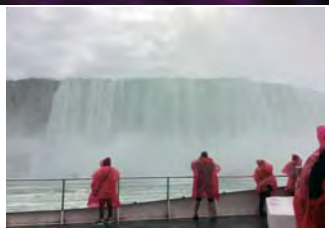
思い切って９月７日から６日間、息子と二人でカナダを旅してきました。

９月７日（木）ツアーは添乗員も入れて１０人です。自宅を出て東京国際（羽田）空港から１３時間の長旅でトロントに着きました。１３時間の時差があり７日の１７時着。トロントが見え始めた頃に美しい虹が空にかかり、旅の幸運を祈っているかのようでした。飛行場から高速道路をバスで１３０ｋｍ。２時間かかってナイアガラ・フォールズのホテルに２０時に着きました。天候はすっかり秋。北海道より涼しいです。

ホテルから歩いて１５分で、ライトアップした世界三大瀑布のナイアガラの滝を見学。アメリカ滝とカナダ滝が並んでいます。月とライトアップされた滝（写真）が幻想的でした。



９月８日（金）、ナイアガラ・クルーズで半日観光しました。滝しぶきを浴びるのでカッパを着用。白い水しぶきと泡立つ波と神秘的な青緑色の水が美しい。目の前に迫る滝の「グゥオー」という轟音と、滝から上がる水煙と水しぶきの迫力に圧倒されました。



ナイアガラの滝は見る角度によってさまざまな姿を見せてくれます。カナダ滝は急カーブで弓なりになった形が優美でホースシュー滝とも呼ばれて人気のスポットです。

写真・ホースシュー滝

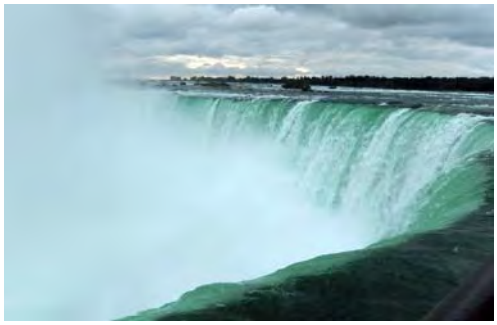


写真
まるで森から滝つぼに流れ落ちているかに見えますね。

バンフ国立公園の氷河湖

ナイアガラを観光後、トロント空港に移動し今度はカルガリーに飛びました。４時間の飛行でカルガリーについたのは１８時半です。ツアー会社が用意してくれたバスに乗り１２０ｋｍ、約１時間半でバンフの山の上のホテルに２０時半に着きました。

カナダ国内なのに時差があるため、そのたびに時間を合わせるのが大変。それだけでも広さを実感しました。

モレーンレイクをバックに

９月９日（土）早朝にホテルを出発し２つの国立公園を訪れました。最初にバンフ国立公園のモレーンレイク、ペイトレイク、レイクレイズ、ポウレイク、クロウフット氷河などを見学しました。

ガイドは日本人女性の小此木さん。素晴らしい解説を聴き逃すまいと努力しましたが、モレーンレイクとペイトレイクの違いはと畳みかけられると、区別できないのです。

小此木さんに後日メールで教えていただきました。

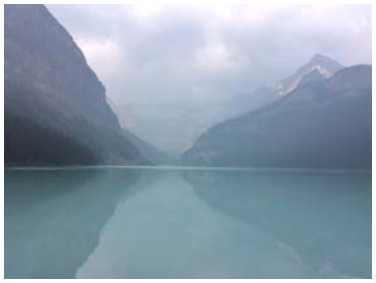
１面の写真はレイクルイーズ。全長２、４ｋｍ、幅５００ｍ、水深９０ｍ。 ルイーズ・キャロライン・アルバータというビクトリア女王の４番目の王女の名前がつけられています。水源の氷河もビクトリア氷河となっており、親子関係を示す氷河と湖を一望出来る場所として人気です。ロッキーの宝石と言われる湖です。

モレーンレイクはターコイズブルーの湖と周りを囲む１０峰の３０００ｍ級の山が有名な場所です。大きな湖ではないですが、ロックパイルと呼ばれる展望スポットから見える景色は非常に美しく、大変人気があります。

左写真はペイトレイクです。標高２１００ｍ付近の展望スポットから見下ろす湖であるため氷河湖特有の濁りの強い色を見せてくれる湖です。バスクリン色、もしくはミントグリーンのような色ですが、水面から見ると透明感がある湖の色です。左側のペイト氷河方向から流れる石灰岩の粉が混ざり込む様子も見る事が出来ます。

右上写真はボウレイクです。標高１９００ｍ付近にあるクロウフット山との風景が有名な水色の美しい湖です。手前の浅瀬は透明ですが奥を見ると水深が深くなり、色が濃く見えてきます。水源のボウ氷河とその奥にあるワプタ大氷原からの冷たく強い風が吹くため常に波立つ湖です。マスのいる湖としても知られており、釣り人にも人気の場所です。

ボウレイクの近くにあった赤いロッジが素敵でした。この周辺はインターネットもつながらないそうです。とても静かです。



左写真はレイクルイーズです。見る場所によってまったく違う表情を見せてくれました。

コロンビア大氷原

二つ目のジャスパー国立公園では雪上車でコロンビア大氷原へ向かいます。トラックのようなバスですが、氷河が割れないのかと心配しました。カナダ製で自然に配慮した特殊なタイヤを装備しています。

向かったのはコロンビア大氷原から流れ出している氷河の一つであるアサバスカ氷河（右上写真）です。滑るので慎重に歩きました。

氷の厚さは最大で３５０ｍという、とてつもない厚さですが、温暖化の影響で氷河は減退しています。溶けて川になっている場所で水をくみ飲みました。

スケールの大きな大自然に感動しました。バンフに戻るバスの中からキャッスルマウンテン（右写真の連山）が太陽で輝いていました。

カナダの西の玄関口バンクーバー

カルガリー空港からバンクーバーへ向かうため９月１０日（日）は５時起床。まだ暗い中での出発だったので、ホテルでお弁当が出ました。２食分あるぐらいのボリュームで味も最高でした。食事の話をすると、２泊したバンフの山の上にあるリムロックホテの朝食バイキングは、新鮮な食材を使いとても美味しかったです。

カナディアンロッキー の短い旅を振り返りながら、美しい朝焼けを楽しみ、バスで 空港に向かいました。バンクーバーには11時到着。カルガリーと１時間の時差があります。

迎えのバスで市内観光です。最初にグランビルアイランド（上写真）に行きました。グランビル橋の下、フォールス・クリーク に突き出した小さな半島です。１９５０年代、カナダの造船業の中心として栄えその後衰退しましたが、1970年代の再開発で買物、食事などが楽しめる人気スポットとなりました。

パブリック・マーケット（左写真）は新鮮な野菜や果物、海産物や各国の食材が並ぶ市場となっており、とてもにぎわっていました。

バンクーバーは映画産業も盛んで、アメリカ映画のロケ地としても有名ですね。アメリカ版の「ゴジラ」はバンクーバー近くのリッチモンドで撮影されたそうです。

バンクーバーの発祥の地ギャスタウンでは１５分おきに鳴る蒸気時計（右写真）の笛の音を聴きました。石畳の道や開拓時代を彷彿させる街並みでした。

ダウンタウンの西端、バンクーバー市民の憩いの場であるスタンレー・パーク（左写真）に行きました。

その中でもシンボル的存在がこの８本のトーテムポールです。先住民族ハイダ族をはじめとする7つの部族が作ったものです。トーテムポールは、先祖代々の伝説や家紋を伝えるために家の前に建てられたのがそもそもの始まり。スタンレーパークはもともとは、３つの先住民族の祖先が共有していたという歴史があるそうです。

カナダは先住民への同化政策もありましたが、２００もの多種多様な民族が共存して暮らしています。移民も多く受け入れており、世界で最も住みたい国の３位に選ばれています。特にバンクーバーは、海、山があり緑が多く、カナダに住む日本人の約３０パーセント、約３万人が暮らしているそうです。

ガイドはバンクーバー在住の日本人女性でしたが、差別や偏見がないと話しました。

宿泊したホテルは、大通りから少し入っている場所にあり、夜の外出には向きませんでした。繁華街のロブソン通りには、２０分ぐらいで行けたのですが帰りに迷いました。街を歩いている日本人に、住所を伝えて教えてもらいましたが、後一歩のところがわかりにくく、添乗員さんに電話で聞きました。ホテルの近くにレストランがなかったのも残念でした。日常会話は必須だと痛感しました。

９月１１日（月）エアカナダでバンクーバーから東京（成田）へのフライトは１時間遅れでした。

エアカナダで気持ちいいと感じたのは客室乗務員として、５０代～６０代と思われる男性、女性も働いていた姿でした。日本だと容姿端麗な女性が圧倒的ですが、人生経験豊かな方たちの応対はジェスチャーを交えてユーモアたっぷりで温かみがありました。

帰りの飛行機には、メイクした男性客室乗務員もいました。それがとても自然で、誰をも受け入れる偏見のない国であることが分かりました。数年前に「バンクーバーの朝日」という映画を観ました。戦前に移民として苦労した、日本人の努力にふと思いを馳せました。

成田国際空港に無事に着き、新千歳空港に向かう夕方、オレンジ色の夕焼けが迎えてくれました。

チップに気を使ったり、道迷いもありましたが、大自然と人々の温かさを感じたカナダでした。また行きたい。その時はもっとゆっくりと、旅を味わいたいと思いました。

バンフのリムロックホテルでは、早朝出発の客に豪華なお弁当を用意。２食分あるほどボリュームがあり、何種類もの果物の詰め合わせが、美味しくて感激しました。

隠された歴史に向き合って20年、共同ワークショップに100人が集う

８月４日から６日まで幌加内町朱鞠内での「東アジアの平和のための共同ワークショップ」（ＷＳ）に参加しました。

ＷＳの活動は今年で２０年を迎えました。韓国や 台湾、日本の各地から小さな街に１００人が集まり、講演や交流会、朱鞠内共同墓地での追悼式、光顕寺での証言など盛りだくさんの集いでした。

ＷＳで出会い、結婚したカップルは、子連れで参加しました。２０年間積み上げてきた東アジアの平和への努力に感動しました。

印象に残ったことを書き記します。

ＷＳ共同代表であり深川市の住職である殿平善彦さん（写真）は「強制労働の犠牲者が『遺骨』という歴史の証言者となって現れ、参加者が共通の歴史認識を育てることができるようになった。毎年途切れることなく若者たちが参加し国境や民族の足かせを取り払った出会いが続いている」と振り返りました。

２０１５年、韓国に遺骨返還が行われたことを、共同代表のチョン・ビョンホさん（写真）が報告しました。

１９９７年から韓日の若者たちが中心となったＷＳが結成され、最初の遺骨発掘が行われました。それ以降、韓日の若者たちは共にＷＳを開いて、７回も遺骨を発掘し、不幸だった歴史的経験を克服して互いを理解する交流の歴史を積み重ねてきました。戦後７０年にあたる２０１５年９月に「遺骨返還の旅」が行われ、１１５体の遺骨がソウル市立墓地に納められました

チョン・ビョンホ共同代表も遺骨を故郷に返すために、この行事を企画しました。「強制労働という人類に対する普遍的な犯罪という観点から捉えなければならない」と述べ、「韓日の若者たちはこのような認識に基づいて、真の和解を模索し、未来を語るようになった」と語りました。

初めて、台湾からの留学生たちが参加しました。その一人であるシュ・ジェン・シュオさんは「台湾も日本に支配を受けた歴史がある」と語りました。

初日、たくさんの報告の後の交流会は、参加者全員の自己紹介がありました。（毎回恒例）その熱気に圧倒されながら、若い世代の草の根の市民運動の素晴らしさに感銘を受けました。

２日目、夜のコンサートでの、チェ・ソンエさんの素晴らしいピアノ演奏は圧巻でした。

８月５日、 幌加内町の朱鞠内湖畔にある共同墓地で、戦時中の強制労働で亡くなった人たちの慰霊祭が開かれました。（左写真）

朝鮮人の遺骨が掘り起こされた場所で、アイヌ民族の伝統に則り行われました。

その後、光顕寺で、元朱鞠内住民だった岡田正直さんの、「私が体験した工事中の朱鞠内」を聞きました。

岡田さんは７歳の時に、朝鮮人労働者が憲兵によって虐殺された現場を目撃。その時のショックで記憶を失いました。逃亡を助けた罪に問われるのを家族が恐れ、違う土地に隔離されました。満州から父が戻ってきたのに合わせて自宅に帰宅し、記憶は戻ります。しかし、長い間、その記憶に苦しみ、家族にも語ることができずにきたことを初めて、公の場で語りました。差別と偏見の歴史に向き合う真摯な姿に、自分はどうなのかと問われたように思いました。

東アジアを繋ぐ「生きる政治」講演要旨
テッサ・モーリス・スズキさん

８月５日、ＷＳでテッサ・モーリス・スズキさんの講演がありました。要旨です。

私たちが研究しているのは、中国・日本・台湾・韓国・北朝鮮、モンゴルという東北アジアにおける「生きる政治」です。

それは自分たちが抱えている問題を、国や地方自治体に頼らず、自分たちの手で、自助努力で解決することです。この空知民衆史講座もその一つの事例であると思います。様々な問題、特に日韓の歴史問題を基本的に自分たちの手で乗り越えようとしています。

今、その一つの事例として調べているのは長野県の上田市にある「地域通貨ま～ゆ」というグループです。ここでも、多くの日本の地方都市同様に、高齢化問題とか、社会のつながりが希薄になっているという問題があります。上田ま～ゆは、その地域通貨を基盤にして、さまざまな面白い社会プロジェクトをやっています。教育プロジェクトとか、有機栽培のプロジェクトとかです。憲法カフェも開いていて、憲法問題についていろいろ勉強しています。

彼らが活動を始めた理由は、おそらく、公的な政治に対する幻滅にあると思います。それは、多くの人たちが感じていることだと思います。私もそうです。

各地にそんな動きが広がっていくと、社会も変わっていくというお話でした。

みな子の山旅日記

静かな富良野岳

８月１５日、十勝岳温泉の標高１２７０ｍから歩き始めました。お盆なので登山者は少なく、友人と二人でゆっくり富良野岳を目指しました。

天気予報は曇りでしたが、高度を上げるにつれ小雨が降りだし、頂上まで行けるかな～と心配しながら歩を進めました。高山植物のパトロールも兼ねての登山です。

ダイセツトリカブト

トカチフウロとチシマノキンバイソウ

終日、曇っていて眺望はありませんでしたが、雨に濡れた秋の高山植物が生き生きとしていました。

イワギキョウ

ウメバチソウ

出会った登山者は２０人ぐらい。静かな山と花を楽しみました。

登り３時間半、下り２時間２０分でした。

ヨツバシオガマ

エゾオヤマリンドウ

美瑛富士避難小屋トイレブースの撤収と清掃登山

9月23日～24日「山のトイレを考える会」の美瑛富士避難小屋の清掃とトイレブース撤収登山に参加しました。

２３日は美瑛の印象派油絵の庭にある小屋に寝袋持参で宿泊。この日の夜は激しい雨でした。でも深夜に外に出ると満天の星でした。

２４日は４時起きして、５時に美瑛富士の登山口に向かいました。参加者は私たち山のトイレを考える会のメンバー５人と環境省のレンジャー、美瑛山岳会の会長、山岳整備の方の３人でした。

登山口で簡単に自己紹介して６時少し過ぎに出発。前日の雨で、登山道、特に岩場は滑りやすく緊張を強いられました。途中雨もありましたが雨具を着るほどでなくホッとしました。３時間４５分かかって、美瑛富士避難小屋に着きました。

トイレブースは９月連休の台風で引き裂けていました。（左写真）それでも多くの登山者がブースを利用してくれたようです。

小屋周辺で用を足した人のティッシュを３つの班に分かれて回収しました。私が担当した所では９個。全体では１４個でした。以前は、小屋周辺はテッシュの花が咲いて、放射状にトイレ道ができ裸地拡大が進んでいました。トイレブースの設置で、かなり減ったようです。登ってきた札幌の４人グループの女性は携帯トイレ持参してきたとのこと。徐々に携帯トイレの常備が広がっていると感じました。白金温泉の回収ボッ クスには１４個の使用済み携帯トイレが入っていました。

使用したティッシュは持ち帰りましょう。携帯トイレも常備し活用してください。山をいつまでも美しいままで楽しみたいですね。

私は山のトイレを考える会の創立の頃からの会員ですが、年に１回のフォーラムも最近は別の行事と重なることが多く数年ぶりの参加でした。

今回の参加者は山の精鋭ぞろい。沢登りをめぐるエッセーを連載した岩村和彦さんや、「一人歩きの北海道山紀行」のブロガー坂口一弘さんは、初の著書「ほっかいどう山楽紀行」を今年出し、山仲間から好評を博しています。そうそうたるメンバーの中に入り足をひっぱることになってはと緊張しました。

今年最後の紅葉を満喫しました。

本 BooKs

キジムナーkids

上原正三著　現代書館
１７００円＋税

本書は、ウルトラマンシリーズの脚本家として知られる著者が、終戦直後の沖縄を舞台にした自伝小説です。

主人公は小学5年生のハナー。疎開先の熊本から沖縄に帰ってきました。ハナーはあだ名で緊張すると洟（はな）が垂れるから。友達はハブジロー、ボーボー、ベーグァ。学校に行かず、どこに住んでいるのかもわからないサンデーとも友達になりました。

彼らはアメリカ軍のトラックや倉庫などから、食料・タバコ・衣類・電池などもろもろの物資を盗んでくる同志。それらを「戦果」と呼び、その隠し場所が「キジムナーハウス」です。キジムナーとは沖縄語で妖精のこと。彼らは冒険をし、たくましく生き抜きます。上原さんの描写はみずみずしく、当時の子どもたちの姿が目に浮かぶようで、ぐんぐん引き込まれました。

聖地・御嶽(ウタキ)に囲まれ、子どもはキジムナーの存在を信じ、大人は子どもに何かよくないことがあると「マブヤー(魂よ)」とおまじないを唱え、それを方言のウチナーグチで綴ります。その土の匂い、空気の匂い、そして精神のありようの豊かさに感動します。

もちろん舞台になっているのは、アメリカ軍との地上戦によって焼き払われ、多くの人が命を落とした土地です。少年たちもみな、苛烈な体験をし、深い傷を負っています。彼らがたくましく生きる日々が描かれる中で、ひとりひとりの過去が明かされていきます。

集団自決した村で生き残り、言葉を忘れた少年ベーグァ。グラマン戦闘機の機銃掃射で母と兄と右手を失ったポーポー。アメリカに複雑な感情を持つサンデー。

怖がりのハナーは亡霊と話をしようとします。死者と生者が折り重なる沖縄から目をそらしません。「フリムン軍曹」は、壕（ごう）の中で人骨を仮面とする亡霊のような男です。彼は戦争から逃げ続けながら、その戦争が終わった時、自ら「軍曹」と名乗り、死者を弔い続けてきたことをハナーに語るのです。ハナーの父は「戦場では、みんな幽霊だ。幽霊にならなきゃ生きていけない」「幽霊も仲間、だから怖くはないんだ」と語る場面が印象的。

平和とは「生きていていいんだ」と言える自由のこと。著者の命への賛歌に涙が溢れました。

まるで映画「スタンド・バイ・ミー」の世界を私も追体験するように読み終えました。

今年一番の面白い物語でした。ますます沖縄が好きになりました。

いわて星日和

有田美江著
寿郎社１７００円＋税

ダウン症の３女シホさんと共によりよい環境を求めて札幌から岩手県の奥中山に移住した有田美江さんのイーハトヴな日々を綴ったエッセイです。この本は、岩手県内の同人誌に連載したものをまとめています。

自然豊かな雪深い土地で、土地の人と交流しながら、高等養護学校の寮生活を始めたシホさんの成長ぶりが描かれます。週末に帰ってきたシホさんと映画にいったり、お祭にいったり。平日は仙台の友人と会ったり、小旅行も楽しみます。ショウガイジであることを悲壮に受け止めず、ユーモアも交えて綴ります。情景が目に浮かぶ詩のような文章です。

私がダウン症にイメージしていたのは「明るくて歌が好き」とか、のびのびとした作風の書家の金澤翔子さんの姿でした。シホさんは怪我がきっかけで、パニック症状を起こすようになり、人混みを怖がるようになったことを知りました。ショウガイジといっても人によって、みんな違うのですね。

自然描写がステキです。「温泉と星空と」に、こんな一節があります。「星空をぐるりと眺めて、思いっきり深呼吸してみた。星の息がこちらの体に吹き込まれるよう。あの星だ、あの星にしてみよう、と狙いを定めて息を吸う」。こんな１行も。「短いようだけどたくさんの思い出が満天の星のようにチカチカ瞬いている」。この言葉が好きです。

我が家でも晴れた夜には、夫と星空を眺めています。銀河通信も「たくさんの人が銀河のようにつながったらいいな」と思って続けてきたので、有田さんとシホさんの歩みが重なりました。文章が温かくほっこりします。

ほっかいどう　山楽紀行

坂口一弘著
共同文化社　１８００円＋税

坂口一弘さんは、私の山仲間のお一人です。北海道新聞に今年２月までの約５年間、１１５回連載されたエッセイや多数の写真で再構成。道内の主要な山、１３９山の特色・魅力・歴史などを、坂口さんが複数回登った時のエピソードを中心に綴っています。ブログ「一人歩きの北海道山紀行」は山登りする人で知らない人がいないくらい。まさにシニア憧れの人です。

本書には厳しい山だけでなく、市民に親しまれている藻岩山や函館山についても書いています。それも深い知識に裏打ちされていて興味深い。少年の心で登り続けて、２回のがん手術を乗り越えました。

すでに道内６５０の山を登った坂口さん。尽きぬ好奇心に刺激を受けました。

命をかけて夫婦で監視国家を訴え続けた

『ヒトラーへの285枚の葉書』

樋口 みな子

ナチス・ドイツではヒトラーや体制批判をしただけで死刑に処せられました。恐怖政治の中で、敢然とヒトラーへの批判をペンと葉書で行った夫婦が実在しました。この実話に基づいた小説を映画化したのが本作です。

フランスへの勝利に沸く１９４０年のドイツ・ベルリンで、工員のオットー（ブレンダン・グリーソン）とその妻アンナ（エマ・トンプソン）に愛する息子の戦死が知らされます。「息子が死んだのは、オットーと戦争とヒトラーのせいだ」と取り乱すアンナをオットーは静かに受け止めます。

悲嘆のどん底から、ある日、オットーは１枚の葉書に「総統は私の息子を殺した。あなたの息子も殺されるだろう」と記し、街のビルの階段において立ち去ります。葉書は自由報道と名乗り、街中にヒトラー政権への抵抗の刻印をしたのです。いつ捕まるかわからない恐怖に、私も身がすくむ思いで見つめました。葉書には「ヒトラー政権で平和は訪れない」「自分を信じろ！ヒトラーを信じるな」「この自由な報道を広めよう」などと書きました。

原作は１９４６年に書かれたハンス・ファラダ著「ベルリンに一人死す」です。ヴァンサン・ペレーズ監督は2007年にフランス語版を読んで心を奪われます。この本をきっかけに自分のルーツを確かめたくなったとインタビューにありました。叔父の一人はロシア戦線で戦死。もう一人は、ナチスのガス室で殺されていました。監督にはスペイン人とドイツ人の血が流れていますが、ナチス党員は一人もいなかったことがリサーチで分かり、映画化への思いが大きくなりました。実在した夫婦の住居跡や刑務所跡なども訪ねて制作したと監督は語っています。

冒頭に描かれた息子ハンスの戦死。個の尊厳が、押しつぶされていくさまを凝視させます。手の表情も繊細に描かれ印象的でした。悲しみに震える手。亡き息子の像を彫る手。そして、葉書に告発文を書く手など・・・。

ひそかに葉書を置き続ける夫婦のレジスタンスは２年近く続けられました。その数、実に２８５枚。見つかれば処刑されることを覚悟でした。しかし、夫婦にとっては幸せな２年であったのかもしれません。人としての尊厳を守る闘いで、夫婦の愛を深めます。この時代を生きた人々の声が監督に語りかけていたのではないでしょうか？

言論の自由がなかった時代、命を削って、監視社会やファシズムに、たった二人で言うべきことを言い続けた勇気に胸がいっぱいになりました。自分にそんなことができるだろうか？　無名の夫婦のまっすぐな抵抗に心揺さぶられました。世の中を変えていくのは、小さな勇気の積み重ねです。共謀罪が成立してしまった日本も、監視社会がひたひたと押し寄せています。それに抵抗する一人でありたいと思いました。（札幌映画サークル会報「Cineaste」１０月号に掲載）

夜明けの祈り　アンヌ・フォンテーヌ監督

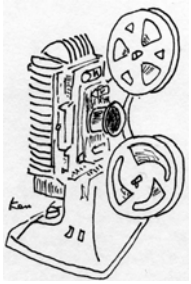
第２次世界大戦後の１９４５年１２月、ドイツ軍に代わってポーランドを占領したソ連軍兵士による性的暴行という隠された史実に基づいて作られた映画です。

街に派遣された赤十字の施設で医療活動をするフランス人医師マチルドに、修道女が助けを求めます。修道院では７人の修道女が妊娠、臨月を迎えていたのです。子どもを身ごもったまま誰にも相談できぬ修道女たちの命を救おうとする物語。

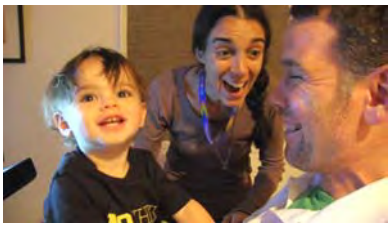
人道を貫くマチルドの誠意が、信仰や体面を優先するように教えられた修道女たちに、新たな視野と希望をもたらすのです。修道女たちは、暴力的な外界からかけ離れた純真な存在として描かれ、清貧な雰囲気を浮き立たせるカメラです。陶器のように白い彼女たちの横顔を照らす光。それはまさに、夜明けのそれを連想させるような、希望を予感させるのです。アンヌ・フォンテーヌ監督は光と影を上手に使い、戦争と性暴力の罪、純粋な信仰心などを表現しています。何より命の尊厳を描き切っていて感動しました。ラストは光と希望があふれます。

今も紛争地で、女性たちが非人道的な扱いを受けている事実を忘れてはならないと思います。

ギフト　僕がきみに残せるもの



クレィ・トゥイール監督



アメリカン・フットボールのスター選手だったグリーソンは２０１１年、難病ALS（筋萎縮性側索硬化症）と宣告されます。そのうち歩行や会話が困難になると知り、生まれるわが子に生きる証を贈りたいと決意します。自分の姿や声を撮影したビデオダイアリーをもとに製作されたドキュメンタリーです。

グリーソン自身や家族、友人が撮影した４年間１５００時間におよぶビデオダイアリーによって構成され、クレィ・トゥイール監督が編集しました。

トライアスロンに参加したり、火の起こし方をカメラの前で語り、自分の全てをわが子に伝えようとしました。

天真爛漫な息子の成長のほほえましさとは逆にだんだん病状が悪化して寝たきりになり、自分を見失っていくグリーソン。妻のミシェルは介護疲れでイライラが募り喧嘩にもなります。厳しすぎた父親への反発も、ありのままに言葉にします。

選手時代のあきらめない精神は「白旗を揚げない」と決意させます。コミュニケーションに欠かせない視線入力装置の改良などにも力を入れてきました。全力で生きるグリーソンに、生きることの意味を考えさせられました。

キリスト教による治療に連れて行った父に、「神に頼らなくても僕の魂は救われているんだよ」とグリーソンが言う場面に泣けました。グリーソンの生き方がその言葉に凝縮されていると思いました。

この映画の素晴らしさは、自分の難病に向き合うだけでないところです。「目標をもって生きる姿を見せて同じ境遇の人の力になりたい」と、非営利団体「チーム・グリーソン」を設立し、人工呼吸器をつけた人の意思疎通に欠かせない、音声合成機器の保険適用の維持を国に働きかけ「スティーブ・グリーソン法」を成立させたのです。

今もALS患者の生活の質を向上させる取り組みに力をいれて発信を続けている姿に逆に励まされました。

ハイドリヒを撃て！「ナチの野獣」暗殺作戦

ショーン・エリス監督・脚本

ナチス第3の男ラインハルト・ハイドリヒの暗殺を、史実をもとに描いたサスペンス。

ハイドリヒは残忍性極まりない統治により人々から「プラハの虐殺者」と呼ばれます。

手持ちカメラで撮影された荒々しい映像が実行する二人の心情を表し、多くの人が犠牲になった愛する国を、ナチスから取り戻したいと突き進む気持ちが胸に迫りました。

その地獄の苦しみに打ちひしがれながらもチェコ国民の想いと兵士たちの葛藤と勇気が丁寧に描かれていました。

３年前に石畳の美しいプラハを旅しましたが、壮絶な歴史を知り、自由に生きられる幸せをかみしめました。

１０月２４日に上映会があります

「知事抹殺」の真実

我孫子亘監督・撮影

２００６年に突然の汚職事件で辞任した元福島県知事・佐藤栄佐久さんの真相に迫ったドキュメンタリーです。

１９８８年から５期１８年にわたって福島県知事を務めた佐藤さんは、地方分権・地方主権の旗の下に国の政策に真っ向から異議を唱え、原発の安全神話にも疑問を呈するなど「闘う知事」として知られていました。06年9月、突然の収賄罪で失脚するのです。

映画は、佐藤さん自身の証言により、東京地検特捜部によって作り上げられた架空の収賄罪やマスコミの偏向報道によって知事辞任から逮捕、有罪まで追いやられた当時の真実を白日の下に晒します。

身に覚えのない汚職に佐藤さんは潔白を主張しますが、この事件で、事情聴取を受けた人々の３人が自殺未遂したことに佐藤さんは気持ちが揺らぎます。しかし、何の証拠もなく収賄額０円で有罪としたのです。

冤罪はこのようにして作られるのか？と体が震えました。共謀罪が成立していない１０年前の事件が、今まさに政府に都合の悪いことをする人々を苦しめるのか？と訴えます。

佐藤元知事は、自分を支えたのは、「私を信じ続けてくれた何人もの市民だった」と絶句して涙を流すシーンに私も涙しました。

私も上映会の賛同人です。郵送読者の方にはチラシを同封します。上映会は１０月２４日（火）札幌エルプラザ２Ｆ。問い合わせ/090-8426-5262(谷）090-2875-8362(大関）

購読料と寄付ををありがとうございます
（敬称略）8.11～9.29

朴錫俊/ 豊村みどり/東由佳子/片山敦子/佐藤正人/佐竹政治/相馬述之/川原茂雄/阿保亘/宮崎信恵/佐々木睦子/高橋儁

合計２４０００円は印刷と送料に使わせていただきます。ありがとうございます。